

国際交流の一環としての柔道指導方法について
ベトナム - オリンピックソリダリティー・テクニカルコースの指導を経て

濱田初幸*

A Teaching Method of Judo as a part of International Exchange

- Through teaching of Olympic Solidarity Course in Vietnam -

Hatsuyuki HAMADA*

Abstract

The author had an opportunity to teach judo in Hanoi, Vietnam from 21 to 30 August, 2003 as a judo expert of the Olympic Solidarity Technical Course.

The participants were 40 selected judo coaches nationwide including 6 females. Upon their request, instructing on *ashiwazas*, especially of *ouchigari* and *kouchigari*, was chosen as the main theme of the course. Since most of the Vietnamese are in the lighter weight categories, improvement of *ashiwaza* skill would be important to be more competitive in world judo.

Although it was physically challenging environment in the venue, extremely hot and humid, some of the participants were enthusiastically participated in the course by taking notes and asking many questions. *Tatamis* at the venue donated from Germany were in good condition, and most of their *judogis* were sent from Japan as a part of Recycled Judogi Program of International Judo Federation and All Japan Judo Federation. The author's poor English and dialect difference among local regions, communication was not always easy during the course.

Judo is a minor sport in Vietnam, but since 1991 Vietnam Judo Federation has been trying to improve the situation by inviting judo experts from foreign countries, and been supplying their top players sufficient training environment and funding. At the time, their main target was to win in South East Asian Games, which the country would host in 2003.

Improving skills of *ashiwaza* seems to be the key to advance judo level in any ASEAN countries as well as in Vietnam because of their physically smaller characteristics. The following sample of recommended *ashiwaza* training system was presented: (1) towel gathering training, (2) sweeping foot training, (3) *tsubame-gaeshi* training, (4) self traveling uchikomi of *ashiwaza*, (5) four directions from *ouchigari*, (6) three directions from *osotogari* and *ashiguruma*. In addition to such technical training, extensive trainings of mental and muscular strength should be needed for the Vietnamese to become more competitive in the near future.

KEY WORDS: *Judo, Olympic Solidarity Course, Vietnam, Teaching method*

*伝統武道・スポーツ文化系

はじめに

21世紀を迎えた今日、あらゆる分野において国際化の波は一層加速化、拡大化し、我々の専門とするスポーツ・武道の分野においても避けておることのできない重要な課題となっている。本学においても、平成15年度計画における全学的目標において、国際交流に関する事項が重要施策の一つとして掲げられている。その中では、「国際交流の一層の充実・拡大に努め、本学の国際化を目指す」と謳っており、この目標達成のために貢献していかなければならない。

講道館柔道は1882(明治15年)年5月、若き青年教師、嘉納治五郎がお寺の一室(東京下谷永昌寺)を借りてわずか12畳、門弟9人を集めて指導したのがその始まりである¹⁾。それから120数年の時を経た今、柔道の国際的普及は、我が国発祥の競技としては、他に類を見ない発展を遂げ、IJF(国際柔道連盟)の加盟国は187カ国・地域(2003年9月現在)にまで及んでいる。国際交流の推進を標榜し、また武道課程を有する本学において、諸外国における武道指導論の確立を目指すことは、本学の使命であり、大きく捉えれば国益にも貢献できる重要な任務であると考えている。特に15年度計画における国際交流の具体的目標事項として、「アジアや欧米の大学、研究機関との国際交流に努め、大学間交流協定締結校等の拡大を目指す。」と明記してある。そのためにも海外における指導法の確立は必要不可欠であると考えられる。

近年、世界柔道選手権、オリンピック柔道競技において、競技レベルの均衡化が進んでいる。以前に良く見られた、特定の国、あるいは特定の大陸が強いといった明らかな実力格差が薄れ、各国及び各大陸においてメダルの「分散化傾向」が顕著に見られるようになった。その代表的な例として、2001年世界選手権において男子60kg級金メダリストにアフリカ大陸初の金メダリスト、アニス・ルニフィ(チュニジア)が、2003年女子63kg級において南米アルゼンチン初の金メダリスト、ダニエラ・クルコウエルが誕生するなど、メダル分散

化に拍車がかかっている。

その一方、アジアにおけるメダル獲得国は、(旧ソ連邦国を除けば)大きな変動もなく、固定化されているのが現状である。JUA(アジア柔道連盟)加盟国は38カ国(2003年10月現在)に及ぶが日本、韓国、中国、北朝鮮、モンゴル、イラン、ウズベキスタン、カザフスタンの8カ国以外からのメダリストは誕生していない。特に、ASEAN(東南アジア諸国連合)地域の柔道普及率、競技レベルの立ち遅れは顕著で、世界レベルの大会におけるメダル獲得実績は皆無であり、それらを含めて鑑みると明らかに柔道後進地域と言えよう。この地域のレベルアップを計ることは、アジア全体の競技力の向上に繋がり、ひいては世界柔道の更なる発展にも寄与できるものと思われる。技術レベルがまだ未熟と思われる海外諸国における指導方法に関する報告はあまり見られない。そこで今回、柔道発展途上にあると思われる国々での指導マニュアルとして役立つことを目的とした資料作成を試みた。

筆者は2003年8月21日から30日まで、ASEAN加盟国であるベトナム社会主義共和国の首都ハノイにおいて、柔道コーチを対象にオリンピックソリダリティー・テクニカルコースにおいて指導する機会を得ることが出来た。本稿では、このセミナーにおける派遣体制、ベトナム事情やベトナム柔道の実態、実施した指導方法等を中心に報告し、考察を述べてみることにした。

1. オリンピックソリダリティー・テクニカルコースとは

このコースは開催する競技を決定した各国のNOC(国内オリンピック委員会)がIOC(国際オリンピック委員会)に申請し受理された後、IOCオリンピックソリダリティー委員会がIF(国際競技連盟)へ指導に当たるエキスパートの推薦を依頼し、推挙されたエキスパートによって当該国の競技力の向上、普及・発展を目的としたセミナーである。今回の派遣はIOC、IJF、ベトナムオリンピック委員会の合同プログラムに

よって開催されたものである（資料1）。



資料1 終了証明書（中央はロゲ IOC 会長のサイン）

2. ベトナムという国

今回の訪問地ベトナムは、キン族と呼ばれる民族が9割を占め、そのほかに50以上の少数民族が存在している多民族国家である。インドシナ半島の東側を南北に縦長くS字状に縁取るように形成され、国土の4分の3が山岳地帯で覆われ、人口約7,655万人を有している。1975年、ベトナム戦争が終結し解放されるまではサイゴンと呼ばれていたベトナム最大の商業都市ホーチミン市、北は政治、文化の中心地でもあるハノイ市がこの国を代表する二大都市である。豊かな自然や、フランス統治時代に建てられた教会、千年以上の歴史を持つ由緒ある寺社など中国文化の影響も強く受けていて、独特の異国情緒を味わうことが出来る国である。

セミナー会場となったハノイ市内は人と車とバイクで溢れかえり、街には更なる成長を遂げよう

とする活気が漲り、ドイモイ政策（刷新）による経済改革の成果も見られ、思っていた以上の賑わいを見せていた。至る所で天秤棒を担いだ行商人が行き交い、雑踏の路上市場には、野菜や果物、豚、鶏など様々な食産物が豊富に山積みされている。また、携帯電話がかなり普及して、それを使って大声でやり取りしている姿に接すると、この国の経済が如何に成長しているかを見ているようであった。バイクや乗用車、電化製品などは日本製の物が多く見られ、ブランド的存在として人気もあるようだが、韓国、中国製品も負けず劣らず進出している。この地を訪れた日本の多くの人が、まず驚くのはバイクの多さであろう。その運転の荒々しさも去ることながら、絶えず鳴り響いているけたたましいクラクションの騒音も相当なものであった。バイクドライバーのヘルメット着用など勿論皆無で、一台のバイクに3、4人が乗って走行していたり、一時停止、左右確認などする様子もなく、交通法規がこの国には本当にあるのかと疑いたくなるような、我々にとっては危険極まりない無謀で強引な運転が見られた。そんな中で、ドライバー達の強引な運転を難なくかわし、車と車の僅かな間隙をスルリとぬって、平然と道路を横切って行く歩行者の光景もまた驚きであった。

日本の若い女性を中心にブームを呼んだベトナム観光は、世界中を震撼させた「SARS」のあおりを受け、相当落ち込み、滞在中旅行者らしき日本人を見かけることはほとんどなかった。それまでは年々増え続けていた欧米諸国からの旅行者も激減し、経済的にかなりダメージを受けているとのことであった。しかし、物価が安く（日本の約5分の1、通貨単位はドン）、食材が豊富にあり、世界遺産に4カ所（ハロン湾、フエ王宮群、ホイアンの町並み、ミーソン遺跡群）も登録され、歴史ある遺産を有し、多くの魅力を持っている国でもある。また湖が点在しているハノイにあって、タイ湖の美しさは一際素晴しかったが、他にもまだまだ多くの観光スポットが存在している。郊外に車を向けて走らすと、直に長閑な田園地帯に出ることができ、そこには日本の古き良き時代の面

影を彷彿することができる。農業従事者が多いこの国は、ノン（三角錐をした編み笠）をかぶり、素足で肩に天秤棒を担ぎ、農作物を運搬している様子や、頭上に果物などが入った大きな籠を載せて歩いている農民の姿、また子供達が手に鞭の代わりとなる竹棒を持ち、水牛の群れを追っている光景もよく見ることができる。さらに触れ合う人達は、礼儀正しく、謙虚で長幼の序を重んじていて（中国文化、儒教の影響からか）、人柄が良く、この上ない親しみを感じることができる。素朴で親切な人々、自然豊かで情緒的な雰囲気、ノスタルジックな街並みを残しているこの地は近い内に再び、日本人のみならず、諸外国から多くの観光客で賑わいをみせることになるだろう（写真1, 2）。



写真1 ノンをかぶり農作物を売っている人々



写真2 至る所で見られる水牛

3. セミナー指導内容

指導対象者は、ベトナム国内から選ばれた柔道コーチ40名で、うち女性指導者は6名であった（全国14県から選抜されたコーチ達でベトナム南部から召集された者が多くいた）。参加者の技術レベルにかなりの格差が見られ、初段から4段程度のレベル差があり、年齢層も下は20歳代から最高齢者は64歳と幅広い年齢集団のセミナーであった。指導内容は、彼らからのリクエストに応えることにしたが、やはり多くの外国選手が苦手とする「足技を中心に指導を受けたい」との意見でまとめ、実際の試合の決まり技として多く用いられる、「大内刈」や「小内刈」等に時間を割くことにした。固技や形の指導もして欲しいという要望もあったが、日程の都合上、投技を優先し実施することにした。その他にもいくつかの要望が出たが、今後引き継いでいきたいと考えている。ベトナムの選手達は、軽量級や、中量級の選手が多く見られ、重量級の選手が少ないため、足技中心のセミナーがより競技力の向上に繋がるものと考え、そこにポイントをおいて指導することにした（ASEAN諸国においては、男子55kg級、女子45kg級の階級が設けられ、本来のIJF規定より軽い階級が正式採用されている）。参加者の中には、新聞でこのセミナーが開催されていることを知り、飛び込みで参加してきたハノイ体育大学マージャーの教官4名や、ハノイ市柔道協会のジュニア選手達も見学に来て来た。

ベトナムの天候が、高温多湿で熱帯モンスーン気候に属しているのは知ってはいたが、連日、突き刺すような強烈な陽射しの上に、湿度がやたら高く厳しい時期の開催であった。さらに会場の「クワンヌアスタジアム」は建設半ばで、電気が通っていないため冷房施設、通気孔も一切ない無風状態、まるでサウナ室の中にも入っている様な環境であった（開催時期、場所については今後検討が必要）。筆者を含め、体力の消耗は激しかったが、参加者の中には熱心にノートに書き取り、技術をマスターしようと精力的に質問をする者もいた。その熱意は、さすがここハノイまで、3日間

も費やしてやって来ただけのことはあるなと感心させられた。ホテルから会場までの輸送手段が「バイクタクシー」の時もあり、後部席に乗っているその間のスリル（前述した通り）は、この国でしか体験できない良き思い出となった。

海外遠征でよく問題になるのが畳であるが、今回はドイツから贈呈された畳を使用していて、緩衝性や硬さに関して大きな障害はなかった。彼らが着ていた柔道衣は、リサイクル柔道衣（IJFと全日本柔道連盟の合同事業で、日本で使わなくなった授業用柔道衣等を集め、無料で各国に送っ

ている活動）を着用している者が多く、漢字で学校名や個人名が刺繍してあるものや、生地が薄く袖や丈が極端に短い空手衣を着ている者も見受けられた（この国ではテコンドーが盛んである）。講習は筆者がお粗末な英語で行い、それを英語の出来る受講者がベトナム語に訳す形で行ったため、一つの説明にかなりの時間を要し、意図することが上手く伝わらないケースもあった（南部と北部で方言がかなり異なり、通訳者が南部出身で北部のコーチ達はさらに理解に苦しんでいた）。想像もしないような質問に、冷や汗をかくこともあり、

資料2 講習会日程・スケジュール・プログラム

時間 日	AM9:00 ~ 11:00	PM3:00 ~ 5:00
1日目	開講式 講義 「講道館柔道の歴史 / 稽古方法」 実技 - 組方, 進退動作 出足払, 送足払, 大内刈 小内刈 【一人打込 (その場・移動しながら)】	投技の基本 * 崩し (八方の崩し) / 大内刈 (その場で) 三人打込 移動打込 - 追い込んで / 引き出して - 釣り手側に移動して掛ける
2日目	既習技の復習 * 小内刈 その場での入り方 (打込方法) 引き出して掛ける 追い込んで掛ける	既習技の復習 * 小内刈 ・ 釣り手側に回しながら掛ける ・ 小内巻込 / 小内刈を小内返 ・ 小内刈を支釣込足
3日目	既習技の復習 * 背負投 ・ その場での入り方 (打込方法) ・ 三人打込 ・ 追い込んで / 引き出して ・ 引き手側, 釣り手側に横移動しながら掛ける	既習技の復習 ・ 小内刈 背負投 ・ 大内刈 背負投 ・ 小外刈 背負投
4日目	既習技の復習 * 体落・その場での入り方 (打込方法) ・ 追い込んで / 引き出して ・ 引手側に横移動しながら掛ける ・ 大内刈から体落	既習技の復習 * 巴投 その場での入り方 引手側に引き出ししながら掛ける 正面からフェイントを使って掛ける
5日目	既習技の復習 * 大外刈 ・ その場での入り方 (打込方法) ・ 追い込んで掛ける ・ 大内刈から大外刈 / 膝車から大外刈 * 内股 ・ その場での入り方 (打込方法) ・ 追い込んで掛ける	(固技) * 絞技 ・ 送襟絞の基本動作 ・ 送襟絞の応じ方 ・ 立技から絞技 (相手の一本背負投 送襟絞)
6日目	(固技) * 関節技 ・ 四つん這いの相手の背後から 腕挫十字固 ・ 正面から攻めてくる相手に対し 腕挫腋固 ・ 背後から攻めてくる相手対し 腕挫腋固	(固技の連絡技) ・ 抑込技 絞技 腕挫十字固 抑込技
7日目	閉講式	

浅学菲才を反省させられた。特に審判方法、形に対する質問が多く出された。「小外刈」の解説中にアキレス腱辺りを狙って刈ると効果的な技になると説明すると、「それは危険だ、アキレス腱が切れて、怪我をしてしまうからダメだ」などの応答もあった。受講者のレベル差がかなりあったことが、このやりとりからも理解していただけるものと思う。実施内容の詳細は資料2に添付した(資料2, 写真3 - 8)。



写真5 準備体操をする受講者達



写真3 開講式でスピーチをするホーン会長



写真6 投技の説明を熱心にメモを取る受講者



写真4 集った受講者達



写真7 固技の説明をする筆者



写真8 全日程を終了し全員集合

4. ベトナム柔道の歴史と現状

ベトナム柔道は、第二次世界大戦時にこの国に派遣された日本人兵士によって1945年頃に伝わったのが始まりと言われている。ベトナム戦争中、一時的に中止になり、1975年から活動が再開され、1988年からは交流試合が行われるようになり、3年前からはベトナム国際柔道大会（ホーチミンTVカップ）を開催、日本、韓国などが参加し盛り上がりを見せている。

ベトナム柔道連盟は、21県からなる地方連盟（北部ハノイ市を中心に3県、中部フエ市を中心に6県、南部ホーチミン市を中心に12県）と特別な機関である軍隊、警察、教育機関の3組織、合計24組織から構成されている。会長は親日派で知られるホーチミン市在住のHOANG VIET HUNG氏、柔道人口は約7,000人、有段者1,000人を超え、6段以上が30人を超えているとのことである。この国においては、柔道はマイナー競技の一つであり、競技人口を増やし、国際大会で活躍できる選手を育てることが、今後の課題である。レベル向上を目的とし、1991年にロシア人指導者を招聘したのを皮切りに、現在は中国人指導者や日本人指導者がナショナルチームやハノイ市を中心に指導強化に当たっている。各県の指導者の多くは、それぞれの県にある体育省に勤務している者が多い。ナショナルチームの選手は、ハノイ市にある合宿センターに集められ（以前はホーチミン市）、職

業として給料をもらいながら柔道に専念できる恵まれた環境にある。現在40数名がナショナルチームの選手として登録され練習に励んでいる。ただ、選手選考方法や試合における判定などに関して、いまだに南北分裂時代のしこりがあるようで、アンフェアな判定や政治的な問題等で、南部役員と北部役員の間で激しい言い争いやトラブルが度々見られるとのこと。筆者滞在中ナショナルチームの選手達は韓国、中国、日本などに分散し海外遠征に出かけ積極的に強化に励んでいたが、彼らの最大の目標は、オリンピックや世界選手権に匹敵するか、それ以上の重要性を持っていると言っても過言ではない「South East Asian Games (SEA GAMES)」で金メダルを取ることにある。2年毎に開かれ、22回目を迎える2003年の大会はベトナムで開催されることが決定している。そのために例年以上に強化に力を入れているとのこと。街のあちこちの看板や飲料水等のラベル、バスやタクシーなどの広告もこの“SEA GAMES”の予告ポスター（水牛がメダルをかけポーズを取っているイラスト）で彩られていることから、この大会への意気込み、国民の期待の大きさ、関心の高さを窺い知ることができる。（写真9）参加国はASEAN加盟国でフィリピン、タイ、マレーシア、



写真9 SEA GAMESのイラスト

インドネシア、ラオス、カンボジア、ミャンマー、シンガポール、東ティモール、ブルネイ、ベトナムの11カ国である。柔道競技はタイ、インドネシア、フィリピンが強豪であるが、どの国も外国が

ら優秀なコーチを招聘したり、講習会を開くなどの強化策を試み、より多くのメダル獲得を目指し必死の様相である。ベトナム・ホーン会長は「地元開催でもあり、2個以上の金メダルを取らなければならない。メダルを取るとマスコミに取り上げられ人気が出て競技人口や、国から分配される強化費が増える」と、強い思いを込めて真剣な眼差しで抱負を述べていたのが印象に残った。柔道は12月6日から8日、ホーチミン市で開催される予定であった。

ベトナム勢の活躍が大いに期待された。

5. 考 察

ベトナムにおける指導内容、実態等を述べてきたが、他のASEAN諸国においても同様の課題があるものと推測される。本セミナーにおいても基本的な技術が、習得されていない指導者も見られたが、重要な課題として克服しなければならない技術は、「足技に対する技術の向上」が挙げられる。日程の都合上、時間が取れず割愛せざるをえなかったが、今後以下に示す内容の練習方法を付け加えることによって、より効果的に課題とする足技技術習得の向上が期待できるであろう。

(その1) タオルギャザートレーニング

この方法はバレーボール競技なども取り入れていて柔道競技に限らず、スポーツ全般に必要なトレーニング方法でもある。畳の上にタオルなどを置き、足の指先でタオルを挟み込み、連続してかき集める。指先の使い方、足底筋の筋力強化を目的とする。

(その2) 刈足トレーニング

軸足で立ち、刈足の指先で自分の名前を自国文字やアルファベットで畳の上を書いてみる。刈足は畳から2, 3センチ浮かした状態で行う。指先に力を入れ屈曲させた状態ですばやく、クイックモーションで行う。

(その3) 燕返

単独で立ち、相手がかけてきた「出足払」をイメージし、その足を透かし(自分の踵が殿部に当たるように足の力を抜き、素早く後方に引く)「出足払」で応じる一人練習を左右足で連続して行い、反射神経、スピードを養う。

(その4) 一人足技移動打込

軸足で立ち「大内刈」、「小内刈」と連続してかけながら前方に移動していく。

「大内刈」は大きく円をかき、「小内刈」は鋭角に素早く刈る。(従前から行なわれている、「出足払」や「送足払」を施しながら、前方、斜め前方、あるいは後方に一人で移動しながら素振りを行なう練習方法も非常に効果的である)

(その5) 大内刈から4方向へ

「大内刈」をかけ、受がかけられた足をやや上げ後方に下がる。取は軸足で立ち、真後、右後隅、左後隅と、それぞれの方向へ2歩、3歩とバランスよく立ったまま受を押しこんでいく。最後は軸足の向きを変え方向転換し「内股」で自分の体も同時に捨てながら回転して投げる。

軸足が強化され、投げる方向感覚(後方から前方方向)、バランスもよくなる。釣手の手首の使い方(手首で受けの頭部が傾くようにあごを突く)や内股に連絡変化した際の両手の使い方を習得さす。

(その6) 大外刈、足車から3方向へ

「大内刈」のモーションから(「大外刈」のモーションで軸足を動かすと受が反応し、刈ろうとする足を捌き、逃げられることが多い)刈足を受の膝裏に当てロックし「横」「後隅」「前方」の3方向に投げる。足の使い方も大切であるが、釣手(手首の動かし方)、引き手の使い方重要である。

以上のような足技練習方法を反復練習していけば、技術向上が比較的短期間のうちに効果的に表れるものと考えられる。全般に小柄で日本人に類似した体型の人々が多く見受けられるベトナムにおいては、有効な練習方法の一つであると推考する。

「小よく大を制す」「柔よく剛を制す」といった表現が柔道の代名詞のように言われるが、ベトナムを始めとする ASEAN 諸国では上半身の力に頼らない、こういった足技を中心とした技術向上プログラムの構築を確立することが、将来を見据えた適切な指導方法であると考えている。

全日程を通じた感想として、基本動作の反復練習を避け、根気強さや粘り強さに欠ける傾向が一部指導者の中に見られたことから、メンタル面の強化も計画的に推し進めていく必要があるのではなかろうか。滞在中、体力測定を実施したり、それに関するデータの確認は出来なかったが、ナショナルチームに所属する数名の選手と乱取稽古をし、実際に組んでみて実感したことは彼らの「筋力不足」「非力さ」を確認することが出来た。これらの課題に対するトレーニングプログラムも積極的に構築していかなければならないであろう。心、技、体に多くの課題を残しているだけに、コーチング方法如何によっては未知なる可能性が期待できる楽しい国であると言える。

6. まとめ

柔道が世界の国々に普及していることは誰もが認めるところであるが、まだまだ国際水準レベルに達していない国も多く存在していることも事実である。こういった柔道後進国と言われる国々に対する支援活動も、柔道発展のために決して怠ってはならない重要な課題である。それぞれの国において歴史、思想、国民性、慣習、体型、身体能力などに様々な違いがあるように、その国々に合った稽古方法、トレーニング方法を工夫し考察していかなければならない。本資料がそのための一助になれば幸甚である。今後もスポーツ・武道を通しての交流を積極的に推進していき、本学の目標である国際交流の向上に微力ながらも貢献できるよう尽力していくことは我々の使命、責務である。このセミナーへの参加を快く承諾してくれた芝山秀太郎学長、伝統武道・スポーツ文化系重岡孝文系主任はじめ関係各位にこの場を借りて深く感謝の辞を表し、稿を閉じる（写真10 - 12）。



写真10 閉講式にてベトナムオリンピック委員会長から花束のプレゼントを受ける



写真11 修了証を手渡す筆者



写真12 ベトナムオリンピック委員会、柔道連盟、受講者全員で

{資料3はIOCに提出した報告書}

資料3 OLYMPIC SOLIDARITY-TECHNICAL COURSE REPORT

To be completed by the expert and returned to Olympic Solidarity within one month of the conclusion of the course.
Please add any photographs and other relevant information. Thank you.

1	National Olympic Committee	VIETNAM
2	Sport	J U D O
3	Type of course (regional or national)	National
4	Dates	2003 8/21 ~ 8/30
5	Number of participants/Participating NOCs	40participants
6	Experts: name, address, tel, Federation, relevant biographical data	Hatuyuki Hamada 1Shiromizu Kanoya, Kagosima, Japan 〒891-2393 7thDAN, National women's coach (1994 ~ 1996)
7	Language was interpreting necessary?	English Interpreting not necessary
8	Place (town, premises where course held)	Hanoi Quan Ngua Stadium
9	Level of course	Middle level
10	Course for athletes/coaches/administrators	Coaches
11	Dates of arrival and departure/length of travel time	2003 8/21 ~ 8/30(10days)
12	Summary of program-content (practical/theory number and length of sessions. Please attach any documents given to participants)	See attached
13	Facilities and equipment give evaluation special films/- videos shown	Gymnasium-too hot Tatamis-good
14	Results (evaluation of performance of participants Please attach examination results, if any)	They studied very hard and took notes during the seminar.
15	Attendance of participants	Good
16	Accommodation (quality hotel, food, etc)	Good
17	Evaluation of transport	No, problem
18	Social activities	No
19	Problems encountered before, during and after course with national federation, NOC, Olympic Solidarity, participants or general	No, problem
20	General comments and recommendations for future course	Avoid hot season.

Hanoi VIETNAM
Place

2003, 8/21 ~ 8/30
Date

Certified as a true statement:

Signature of expert: *Hatsuyuki Hamada*

引用・参考文献

- 1) 決定版講道館柔道 講道館著 p20.
- 2) 濱田初幸：武道シンポジウム 21世紀の武道の意義 pp. 24 - 25. 2002, 12月.
- 3) 濱田初幸：蒼天 鹿屋体育大学財団 月報2003, 12月第153号.
- 4) 濱田初幸：ベトナム柔道コーチセミナー - オリンピックソリダリティー・テクニカルコース, 柔道, 講道館, 2003, 12月号 pp. 98 - 102.